紫式部日記註釋

四

紫式部日記釈注の巻

ものつくりとふといふ人ゝ侍れそろそろけるさふとんつくはけ
ゝ
うゝめうたゝ侍めり。うちとけてふさそしまうたるにそれうた
のさえあるゝ人ゝそなんことゝそのゆゑはひおゝえ侍めり

和泉式部は、作者部類に、越中守大江雅致女、上東門院女房とある
ゝ。和泉式部道貞の妻なるにより、和泉式部とゝへるなり。うたの
ほそ文のとゝのうそけ。はけ。はけきの得なゝ。けーうゝえゝ師ゝはけー
うゝめとに、伝聞ふつきすゝだたるとゝ云なり。れつゝいきすゝだたるうゝめ不
いあれとさえゝる人まて、そなきゝ初をにほひあゝとゝ云なり。といれさ
りをたゝ、文をのうたなり。人は、ゝまてゝ経をいはてゝ人ゝ

うたえんとをうるさとおもはせえ。うたのことのうるはしさ酒に
て祭をいとなみ。ものにまうでたることをうたへるに。をうたへふしの
めかとあるらみ捧へ作り

陳ぞうたえいとをうるさとは。いつこらかはいとをうるさとらとうつほめたる
なり。ものにはえるとは。古今をらくたはるとあて。今とうもたるとうなる
らくたきるめしふまとの今ちみなり。さてにけるなけれ。ちらくとれへるなり。
くもしられそらたるこをえれたはるかけふかいうくさ酒ふらむへきとう
なりとは。宣理をはるめるらを。俗のうみしうくれへるなりとれさ。
ものにはえうたの。歌ぞ。ものにはえたのとに
それなふ人のらみなるん。なむじことるうぬるんはぬそさ酒て

かるはえしにはにんと。今のれらはるなめりとそ。見えたるすちふ作る
さし。そつりけの今らみやとは。れはえ作るに
それなふ。すこしその作をやとんふ見ひて見へし。なむしい新しかた
ぬとい松の景色ふ。ふれそぬとあて。うちなみさそ。そのことをいひて
をりの歌なり。といれさ酒ては。ワレホドこなり。あるえ。のあるい今の
うふえたることの云なり。ふふ酒をたることれなり。今毎の
人ふ。景色のこたふうとく。ぬれはのこたのたとくしく。今のとるのれは
つるなとと。らみはてなる今の酒の作るふれなくきそなるとそ。
れちふふ今のらはるる人なりけるふらをへとたるへ。れ泉いうるや
のすちふ今らみなるへし。そつりけいはのふまつりけふれもそはそむ

たいきはめしずくれたるをいふ。この和泉はをうれてうしいあれとこれこのくに
そつうくなをるいろうのこのらみふはゆゝしとなり
高階業遠朝臣
さきんそのうえ紅小のうたをは。文。度なとのとなりにそ。さひ〳〵歩つとを
ふし侍る
小のうた侍従江侍従とは。文そ中文。度。道長公の北方をいふ。さひ〳〵歩つ
とは。作者部類に。大江匡衡女。母赤染衛門とあて。子父母の名をとり
しこのとなり。さそ。ふらんなり。つまか江侍従とて。娘をつけていふそ。清
か納言のたゝひと同しなり
ことこそやむことなき臣　となり　孫と。主とに。申ゝくしく。文らみと
て。らろうれことふつけて。らみちゝさまと。ゆえなきうりはそうなれを

よふし紅ことをとるふり。袴をつゝ。紅ちつきふ侍れ
やむとれこそは。をゆくすふれなにて。おのゝ〳〵のとゝり。身のほとのとふきあ
らは。ふらみとは。られふらみとての云なり。ふれ袴をく。おのをつゝ。けのこ
ふ紫。てこの江侍従はすくれたるうなり。　まとふ。数年にる
やうとせは。こしそなれぬそうく。たれうゝなる。ふをらみ山て。元といそぬ
らしそみことゝ。てをとゝ。ゆりこにたれなる人ふくをいとほくをた
ほえ侍るそ法なり
やうとせを。ふ。藤そ。ゆりくををは。ふれそとゝふ。用く。
ナンゾトイフトトリテ云ハリ。こしそなれぬそうく。おふこしをれたるまやうの
ほせなりけんとをそつ。福ふこしをれ云とゝふ。ふ末てうたゝ。ふのうれ人をれの

うゐ申あるものの多をいかりさるは三のるを腰勺とゝへれをなり。されば病ゐ
蜂腰病とゝへるゐ。ゐれをゝ。なゐ。ぬのぬゐ。半ぬのぬ。なり。えもんをぬは。イフニモ
イエヌなり。ゐ。ゐをとは。ゐ。めさるるとゐ。いとほ。ををは。他の人のえて。
にをあさるをもゐて。ゐれうこにれもれたる所のいとほ。ゐれをはを
なり

清が納言が枕草子に。うゐけ人さはうゐさうたち。
さなうゐたちして。ゐるほとも。ゐれは。まだをゐ人ぬこ。れほう
清が納言。清原元輔の女也。うゐ枕草子。ゐ人なゐれを。うゐ。した
りうほなるゐたのれうきをゐ。人の下。の丈なとたちしにや。と注本義い
れたりさうゐたる所を。枕草子をゐれ。けゐゐ。ゐうをなり。さなは。

仮名に紫へて男文字をゐれ。ぬことは。ゐうをぬ所をゝへり
うゐ。人ゐことなゐんとれもれこのめる人は。ゐれにゐれとゐしりす
ゐ。うたて。ゐをゐれは。えんゐなゐぬる人をれとすゐうすゐろなゐうを。
も。ゐをあれゐすをこをゐうれことをゐすゐぬほゐ。れのゐゐ。ゐる所
ゐ。ゐれなる所ゐをなるに。ゐをへし。そのあれゐなゐぬる人のをれ。いうてゐ
ばゐゐ。ゐんゐ

人ゐれ。せえのゐ人をの人になゐ。ゐうなをは。れの。ゐ。ゐれゐゐれとゐふ
ゐすをを。ゐゐ。ゐしくあゐくなゐをゐろゐれゐ。ゐゐをれ。ゐれにも。ゐれゐなへゐ。
とゐをなゐ。をを。ゐれをゐれをゐうゐし。ゐり。ゐをうなをのを。ゐれ。ゐ。ゐのをいれの
をゐは。をんと。ゐをゐれをゐんゐ。ゐんゐは。ゐんゐをうれゐれ。ゐ。ゐ。ゐ。

えんなる人と。人がらといふをすこし人なり。からぶるすこうは。えんなる
うたなどめりしかなたなどは。いひてしたゝてすくゝらにきはくなるうたを
いふすゑは。艶ことゝ申して。古へにいへり。これ。えんなる詠めりしきうたそなく。す
くらうにさは漢ゆゝきかなれ。もとより云なり。紫式部えくこれを。えんなるとの。
いはれつかはしうかゝぬかなり。帚木巻の論うしさあやめの君。宇治の宴と
といふに聞しといへれなり。このあそれはかさいはその。えんなるかたぶかなりぬる人の。
いとすこうすきなるかなもを。詠あそれのかたぶすることは。なかりしこともあらず
くさはそうなふてつらふほどふだのつらう。あだなる方にもなるに侍るべしと
なりあたといだかりかなくして。あさかなるうつりなきをいふさまになりし
人の身のそでらくはあらしとれへるなり。きて人がらをなんと思ひこのめる人と。

またえんかなりける人の。ことばつかひでも。うたにはとふいはあらで。身のりきまさらう
ぬかしに見へり。紫式部は二ことにぞあらし。たはさなる人なるべしと見れば
りさてたしかなるぬをなれど。この清少納言のちかは宮中に手をへだてといふこ
とまうの上にえてなり。さことたゝはそこに思ふにらしこれなり
このうたくふまけて。ふしのたまはいひてとるべきことをかくてすくし侍ぬ
る人此ことふりすみのたのこをなくて持なくさめれそふこのたぶ侍り新
と。んすこうもてなに身持とたぶ。思ひ侍るし
うたくは。おのあきの女房とものゆきまうなちかう。かうれんもちひのさまを。う
え人なくいへるかのうたくなりさてそのうたくにつけて。ふしのさ侍りぬる人と
いふつらうのとふて見かしてれへるなり。んすこうさは。えんなるかたそ。さは尓

にとゞまれて、ひさしうにぶく色に、引ぶりて、をとなたへさ身をとたゞ出さて、れ
り、ゆゝしき中文を仕の名なれいかしいえんなるうたをぐしてゝうの雲の有さにら
ひとふわゝ酒屋をきたれへをこつゝとうへおとさにてゆゝんとゝ
ふんをう

花のんなほうせぬや、をのれたひ酒さる秋の秋をそ、にれてかて
なゝめはいと、月やれにしへをもてけんとゝえたるあゝさ酒をさらに
にをゝに作へし

花のんいんすゝうまを作しゝゝゝ見て、ゝしいえんなるうたをぐしてゝうんとゝふ
んなり、なほをこのつまに佛のそふふうく見りたれを作とゝり、れ
はらの中のをたゝつゝひて、秋のらなとそをのゝひ酒さるなり、古ふんつは

とはいかをゝうをと秋のらを、拙れすゝをのうゝなりけ、まをし人を就
中断腸是秋天なとゝいひて、秋を、雅を拙なひのまさる所なり、をそのの
拙れをひのまゝ作ゝしふをーのうゝふ本居てなむれをなりれとをゝれいを
に出れ、待ふれいを年老て月をなるむれ言をうくさうなりしほとに元
しありさすを月のんにやめをつゝんとゝ見るんをのあるをとゝをゝれへをを人
し、を待をおをいをる考へされとも、うゝ所にさをなんとをゝをゝ元をを
ゆりさ酒とゝを待おのうへに元ををるあを酒にて、我身のさたすきれとゝへた
をを見て出へ有りをらほほをゝ元をゝうゝ酒ふうれをなるかゝ
世の人れれむといひ作ゝとゝぶをを、うゝ所にをたり作ゝなんとをうゝれ
て、すをゝ、れくふひをゝりてをゝ元ふんのうちにをほをせにれれいて

けらし作る

世の人それをむとしひ作るハ竹取物語ふうの姫月のれきろうそたるを見てつ
ゆらうも物ゝひなる話なり。あるの月のうたるハ心むを見しけれをと
さすれハひとをにを月を見ていとくなれ作り後撰集ハ月をあそれとハ
ふはいむなり。といへ人のあるけれハらと人をこ（俗ハ世集にえとなり）ひとゝ物のえしし
きゆふなきかで月をあそれとこう物つるなとえて芳はいとゝかゝえ
しのゆゝしなり。とぶとハそなゝをいとして見るをとぶとハゝたた
り作りなんとき人のむとそをなるゝのたふをたゝんとおひをこう
ハしてそのうたりかし要さ頃引りて作るなゝとうくてハとうでを
とゝきとゝりをとのきなゝふなりとゝ物作りなとゆるへき長さに

ふきハ月見ハ物ゝひのゆゝなるのしてさなるを要さ頃へ引りていさゝり
にを見されとも。シカシナガラ人のゝちハ物ゝさのつきせにきとなり。
さて。こゝを世の人のいむなるものとゝなゝそにをうて要さ頃へ引り
こゆゝを人ふとゝんと思ひこの頃にて。白氏ほとふをなる話なり。
月を見をれむをふするハ。白氏文集。贈内詩に。莫對月明思往事。損君顔色減君年。と見こなとゝりやさるなゝしとはなりつゝんをハ。女
ゝ人のこのとゝり。　とゝ京とうとに

風のすゝしゝ秋ゝ久ゝふをてらゝゝぬひとりことをうとなゝしてそなけき
くをゝるとゝきゝしる人やあゝんと申ゝしくなとれ長え作るとゝ物なこ
にをあそれにを作るけき

さて　さうぬいつたなたらに甲でしてんへさなりかけきくそるふ古今集にかく
へさうけるゆふあれたる春ふ女の琴ひきけるをきてらみていれたりけるら
しこまのゆまさたるれ人のすむてきやとゝるなへふかけきくそる琴の弦
そはるとそたるにて我もろくくるひきなれふうたなゝに琴の弦ふさ
けきの声のくそるほとを又さやにてしるあんとれりゆしくきこ
こそイヤくシキうたやてるれしたさあをきくしふんかイヤくシキなりされ
とさとうるひしきなれはおきてしふんもイヤくシクロムキうそ牧
こゝふはをこふもゆるなをうるそあれにも作りけまとれりかこはやうう
ナるそ甲でしてゝるなり人の詩ふうをえすれなるにらてうく事に甲
でしてふて

さるはあやしうくろをすうけたるばうしにさうのことそこんきくへな
うくんふいまそあふる日ことをたふたなとをふひ作くぬ海ふちり
はをうてらをたそたるし。厨子琵琶
ひきをしたりそれふたて作
さるそあのきくしるんやあくんとゆしくきをうけてさやうなくんもこと
うくソレいうくあやうくろをすけなるばうしにきとゆふ元なりさる
きとゆるふつくそあをうけてをらを新して作る作をてこをあやう
くろをすけたるばうしとふくやそ新しなる海をて書きて書なりふう
しい曹司にて我置寄の局のさ海なり。さうのことふ今の十三絃の琴ふく
そこんい和名抄に日本琴云々有六弦俗用倭琴二字夜萬止古止と云

源氏物語ふは、あづまとなりて、琴をたゝき、ふくとゝのへたる
海ゝとあるさまれり。ふかいぶて、さしすゝめしに、
く文なり。と作本義いまれを、弾物のたえ、ふいきにして、なほさうにしなが
り。作えく、あるる日、ちちなさに、てはけそ、ばうなる緒ゆひて、ものかくなる
まざるうゝにひきさのふんいゝ人そ、五ふる日にことちなをれくとゝ、といまし
たり。らもなてなゝ、ふの琴とよなり
れほたなるばゝひとらろひかひをまくつみて作るものひとつにいふ
る物、よれうたりの、えもいまをむゝの作ふなりふたるむつうゝくそひ
ちれは、あけて見る人を作るに
ふる物の、古今の集、もれうたりい物語書なり。むつうゝくは、ムサクロシイなりも

いちはやく世をさりぬ。なりにたる数年年にる
うたつうたかふことをもざと、おきこうそ和し人も作るなりにし
のちをふる人をことふれし
うたつうたにそ今ひとつ乃厨なり。おきこうそ和し人、侍年に式部の丞、百
孝のもとに、この人、長保三年四月辛巳にて、を孫、まれて見る人もこと
ふれしとなり
おもゝかをつまくせちてあそうぬる時ひとつふたつひきみて見る
を、女房ゆつ帰りて、れは、うくれそすまはれそれをしはすく作なる
り。なてふ女ふ、男なふみそらむ、むうはきあうらむをたふ人そせ
れしとおうこちいふをさて作るにを

拙ふ〻い所の書とも所ふ〻せめてこゝは此くつゝ〻なるにうんしたるこゝ〻ふ
つまくは。タイクなるべし。如房いぶ式部のめしつかふ女房なり。れまへはこゝ
女房とその所ひしらふ詞なり。れまへといぶ式部をさしていふくれそすしをく
如て。こゝを書らむを此へりなるふいなにといふとゝふ徒のこゝを省けるふ
てこゝを書らむ如はさそめてなにらに此へるなり。きやうらむをなふこゝ佛
徒をらむさに如こはある所ーさこゝーして。荒しなり。すて。絶なるゝ如ふ
ま書をやとゝふこゝなり。こゝうこちは。こゝうことにるにて。こゝうことはか
ゲクチなり。　れそすまは。一年にらる
拙ふこけるこゝ人のりすゝふのちなこゝうゝ所らーとゝ。こゝ如ふ。ゝなめーなり。
とゝをあにくく行れとれゝもいくゝ酒なれゝなり

拙ふこけるこゝ如房とその所ふこゝうことをきてこゝうーまゝに女のすなふこゝ。徒なと
をらむとをこらうゝ如こゝいをきゝひて。らゝ酒さうし人の命なこゝうーたゝー
もれーとなり。ふこゝきゝひて心如を拙ふこけるこゝ人とゝ此へりれこゝんそひそすくなき
とゝ此へるにらて。命なこゝうめることゝ此へるなりとこはたく式部のたそれにそれた
ろゝれこゝとゝこゝををうくゝ如ひて此へるこゝうこゝ。こゝゝに拙ふこけるこゝ人の命みー
うーとゝふまてにそれゝうーしこゝまれと。中法拾遺抄にたく原行らせんゝうにま
こゝて見法へ拙ふこゝーくすゝーくふむやつゝ命をかーうくこゝくーこゝとゝ所。た
た拙ふこゝ如は。命をなくゝる孫もさこゝ如。ふくく拙ふこゝ手ーこゝ人とゝんそこゝな
とゝ此へるこゝあれはさるたゝーしこゝをゝひて此へるにもゝ。ゝひくゝ酒なれゝオモイヤり
ナイにこゝうゝふくゝ越なゝをゝひてこゝる。まゝにこゝをこゝれをもとゝたる

やうのひとへでんいとひら酒をたやすまうとていえにてあるとかり。　伝れと。

新古今にかる

かとえたさをかり。ろろつのことと。人ふらてことく枯り。ほろこのたきゝ

くしゝ。あちらけふ見ゆる人あり

かといふろつの事にてさをはおのの拙きける人の。命なこうゝなゝしきなに

やうけて。命なきなに。万事もまたさをかりとなり。ろろつのとえくるろ

つの事とも同すちのとも。そ人にろて。一やうなゝにこのうめあくてをく

なりとゝるにて。分れ書。不孝なとは。拙きを拙いまさるにそこなる海きを

を。とろてゝるなり。されそ書ゐむ人にをれのうゝ。されひらある人

はかりてほこうこのにこの人あるとかり。さてをそ。あのとをつたりことろて。

ほふ。このこうこうとふくそうゝ。思へんとそ。決ふまろ。城分のんもちひのある

ものを書のへなり

ろろ門はまくなる人の。海きそことはきまにふるにほんごひきぬが

ゝ。れてなひごちふ。ちちひぐゝうゝ。ずのれとたうになどんとんつきなく

元申るをさなり。と思ひ詩て。ふふ海うをろへきことをえろばうゝ人

ゝ。かふをこう。ふにつむ

ふるにほんこひきはらゝ。ゝにすきひなりゝ。古文古なり。宗家七論ふ学ふふ

りほる女と思ゝ。れてなひちふき。図書に。仏を脱りする女と思ゝ。いつれもはる女の意なり

ひくこのゝ。学。ふまに。ひくきわなりとるをゑめわ拝ふ信そにおをたきわ

たりとゝふとるうとまくなるこ。絵ろみ。長仲。なとは花ますはひてろをゝ

り。とえたり。ふを。我ん酒をに花きとをしめふを。ちつふを。ゑる目
にをう。ほんふつむを
酒して。人の中にすてはれを酒ほ。ひてとをやとれをはほ
ゑんう酒して。人ふはんひをやくなるへ。拍もどうちし。我をとと
へる人ゑまへにはうるさけをは。をのしてとをもをうくを。
いをやふひをはるるまーとり。拍をふるたるなるふひて。今の俗ふをふひ
てを。ほ。文をつけをりをなる。拍もどをいんのりをとするををどに
をりのをデハトホサヌをとをりをうちふつけをりをなる
ことふれとをを拍のうたく。ゑたる人はうたー。たる我んうたをまるすち
をるるへて。人をハなをふなをめるるれんるほかのるぶれをうげをは

深とえれと。えるるほうーむうひやすーまるなることたふあり
れとも。えうたーへ係れり。ほ。ハ脇をなる。拍のうたくを。うのををうたあの拍
のうたをを。拍をの拍のうたはる。うたーはるうたーをを。拍なるるるすへてう
なをとはあをたあれとも。ふいとををを。うるるれハ人をなる
になを人をを。ふるうふんひなるーを房をりふんるうをとはををに我ん
のを人をなをふなを。ちちのんるうをほるををにをいるれをうげををはと
ゑれとりふをを。ふるるふんひなる女房ををむるひをは武級の家ををう
うくほーをにゑゆれとりををえなる。ゑををにをを。ををにををーけふ人角
れとも。ゑるるをーをををなる。　なをめる。数をにる
ふのくをへとるれーゑれと。ゑはうをふはるる級とむるうーとれも

ひて、ほけられたる人にいとゞなりはてて侍るは、かうは、おしはかり
ざりき

ほけ〳〵しとは、さしむかひての心ばへなり。ほがらかといふに反たるを
いふ。さて、あかくのを見て、よからしとされど、まことにて、ゆかしき所と心とは、を
とる所きとなれば、そもとるすしおもはれんと思へど、むかしと思ひて、
いえほして、ゆるなり。むかしおぼえ、メヽダウ、とも言へなり。たとひては、なりまで
へ係りて、ほけられたる人は、老ホレタル人になり。さりとて、猶もよし、女房に、を
とる所きたしをもいそぎ、ほかれたる人になる。まであれば、ところを見て、
我にいへる、我心の中は、さすがに、ゆるしおぼえ、はれしきまで、ゆくとよろしけ
に、ありけんとひしなるへしと思へるにて、我のありさまに、らうらうしくて、とよう

たるなり。さて次に、おしはかりてるさまと、目に見ゆるとは、いたくたがひたる事を
いふ。　さとりしる故、紫部にて。　むかしと紫部、むつかしくとに
いとえんにはづかしく人に見えにくけに、おぼえくしきさまして、ものうたて
このうちしめた、我のうちに、人を人ともおもはずに、ねたげに見えたるさまもの
となんされ、人をいひおとしにくみしを
かくいふにいはゞ、業面せぬ人の、式部の心ばへを推しはかりに、かかくなるべし
と、人の言へる事を思へるなり。おぼえくしきは、ある心がけからはづかしく見るし、つ
らぬなりと、いへるを、我のも様におもほしといひたり。まつりくと、人に見え
にくげにとされ、おぼえくしきさまなり。見れとさんえ、代の人をさなり
見なしには、おいらかにてたゆく、ふてと人のとなんたほゆるところ、これ

ぬひ作るにさうく人ふうう。れんをけものと見れとされてけっとは。
たまい作れとたてこれをうろんとなりひもてなす作
天風雲雨。紫雲せうく人の武新小説面白しと天風雲なり。れんをけものは。
年老て目をれ見ひ〳〵ささ酒を名月にてこのころうく出るなり。されとおい
おとは。ぬのこ年老たるにそあ〳〵孤とあやまてれ〳〵うにてこのほひ〳〵れ
たる人のゆくにてあるさ酒を出へるなり。師のいれたいれ〳〵けものとなるやや
らうん。れん〳〵うなるものは。人のあなつりて。ものとれたさ血を見れとされにけ
と出へるなり。れん〳〵けものうたに人ふうとうの絵にをうく立へり。ふれ〳〵う
と。いれはなり。れんをけと出へることなり。たこれをうろんとなりひもてなす作。
とにたれ〳〵うなるをうろんとしてなりひもてなるをうろんといれ

きにとされにけるいけるとらの毛をうろんといれんをけものふせれたる
ものうろんの中毛にしてのえなり。まてふうくこれをうろんとうとは出るはあに
んようう。ものなれ毛をとなかふ見ひ作〳〵しとなるとはとたひて吹出れとあ
なるは。中文をはのあひ江のうてちひのう酒ものは。たくさ酒のなるさ酒を出へるな
れはこれと。本につけてのんまちひうれあるさ酒なるをとうへ。　こと人うと。
数千年にうる。　れんをけものの数千年れんちけものとに
ありさ酒。文のれ人をとうちとけてはえ〳〵しとなんれれ〳〵。このと。
人うりけふむの酒〳〵うなり　ふたうこと。ものの作そはるをうく作り
ありさ酒い戦分のつ毛のあるさ酒なり。れ毛ものいはあいなの毛なり。うつと
けていうこ作のうんなり。人うこ中文の武新小の作小説酒なり。あ酒く

さまゝ〳〵ふ女房たの中に、俗の人らいまゝてむすめーうなりになりとの給ふ
たり。給ふ義はあるこゝ間い上文ふてくうたらうんゐ文ふとうちとけてらり。中
文の元詞とすへ〳〵とゐれたりたり
くせぐ〳〵くやしーだちそぢ〳〵れまる人ゐを、ゐをめたゝ〳〵仕でら
ら間ー
くせくしい癖ミにてらろつふくをあるゝ間を以てゐそくせくしけふやさ
したつをれふ色くしとやさしたつとふたつふそゆ〳〵ほそまたのほとい祝
も大うたさ多うなるものゆてきまにするをあるたのれんゐそはつうくゐ
めほをそちれきとふ。さちれまる人師そくこの人とふ中文の宮女
たちをふうこ仕そ赤文の元文のうちとけてはえくしとふひさとの給ふ

りてたる文ゆて文の元文のそう給ふ宮女たちふ武部のを
そめゝるらーを以るなり。そのてにをはをめとめて見えくしといれさ給はは
めとい中ふーくむそれして把そうえるゝ間を以て。ふちはるは仏れうれて。
まきーくいむのひうたきゝ間なり。キヅカヒナとふゝ間なり。たゝ〳〵れてそだ
て〳〵れ〳〵そのまゝ〳〵ですてこゝさて又ふふこれそろんとなるひと
てをー侍るゆふ給そゆあたて〳〵れで侍〳〵師ー点るはとうくせの人ふ以ひさと
うれすーてたれ以〳〵ふなふとなてゆ〳〵侍ほーとふふ間なくしう
ふふにつけて次こうなしー様この人のあゝ間を又うこのへたく
さ間ふうすへて人は仕以〳〵うふすこーんたまそけとやうふ。たちゐぬる
を。ゝとくーて丁把。申名をうもをうくうーろやすけき

帝本紀にくゝしろしたくゝとけれどもなほふつゝとはうえへのなさけもおのつゝ
きをつけつゝへきことをやとゝへうにたのたゝ衣のゝ中をもゝとゝ点へやうて
うえへのなきけふあさまう
をしは名めうくあたくしけまとゝ中性の人うゝ心をなくうたゝ
ゝたため又えにくうたさ海せたなふなりぬれはにくゝは作海ゝ
おえ一種の女のき海を出りゝ中性ウとゝいキなり心をなくいとろさうたゝ麻
のかたをしゝうたをゝのなをとはうたをゝにおる人のためうたをゝふとうる
へきさ海せたおしらふいかるほとふなるぬれをとゝ衣なりにくハを文
めうくかるくしけれと高くかれそにくうい作さ
我はとくすくゝちとち帝まことくしくうゝ歩人をたとをふつ

けてゝふらうれちゝをほとふ我の人ふはめとぶ海るめゝ中ゝとぶめほれ
ば。おのゝにおのをいゝことはの中にをこそかるふるほひたちそれく
うゝろでにもうのゝにゝをはえはけらゝをさに作り
これをと一種なり。くすゝとの詞いきふくなる衣の詞なり。と師それれなり。
帝本紀にぼゝけつきくすゝうん我。枕草子に拙ゝなとくすゝうする
もおゝをあふれたをゝ宇治拾遺なとふえたるを考合はしゝくるもた。
作くゝくちをちのもちはめくをちにの中にはえの詞つき
をゝ帝きをくすゝくみなりなゝ歩人はこなたふをゝふれをゝるをひて。
これ一種なり。くみなりなゝ歩人はそのくちの衣をうたきをのれとめことと
むとはえつけらゝくをを出りとゝれきめゝ。のゝは助をなり。きそゝるふ

るまいにもとゆるへきをおほ二のにもにうまてあふは有けりうしろハ
つほ抽ゆふうちあゆまんるうしろしこもれし松草をにすきしのすけこれ
うしろて有ほそにおん屋へをなり抽ふけうしろをえれ名にかとふつれ
もウシロツキなり くせおきはくすきうたの癖をんひてをしかも抽ろこうた
の癖なりさてうかゝうにとり抽抽二家のうち二家はふとうまーてうけるなる
一ひとりはれつれ出れけつてらけん くちさち二年くれもちとに
抽ひすこしうちあえになりぬる人と人のうへうちたとめはる人と
はまーてみをめとだてゝうをさにけ抽伝へけき
これも一結出て二ゆなり抽ひまのうたを言と行とひとゝ五をふ人
のうへをこの方は衣流の中おすの人なり やてをは家の我はとく言ゝく

をの人なふめれとゆるをうる人をのあうさ所にやををとあり されハ
ろろきうたの癖いにらくえびらをらはをれをれをたぶす
をとゆふれのつゝをれなり
人のくせなたうきうはれうをはうあきことのををきうえゝとうを
なげのなさけはくゝ所ほゝうゆり
これも一結出てれをろきうたの癖なくてらたをれふる人ふはれうゝく
てすうなきことををゆをゝとつをてあるなりされとうた人なるうゝに抽つけ
てはなげのなさけはくゝ所ほゝとれり なげをなげうり所のうをて心ふれれ
ぶ抽ふれてたぶてうゝ抽するとをなげのをとをなり夕新出になげのをつ
うひふはけたうとの家白文出にうなくなげのをふをちゝゝ抽ふあたうを

秋なれば、そこにながめの山人をたふせさせ給へる狩衣袖にながめのあそれをうけく
人たふなとあると、会せ又て考へ、なさけをもにもいへるとくるうはにんさへある
をんひてゝなるは、おふんたち、尋本末のうえのなさけそたのつう〜もそつけ
つへきはれをやとゝるとゝ同く、奇にはれなにすき、おふふれて、んさへあてすこ
しらひなり
人すきそてに、ん、ことゝ〜ゝでは、ゝろきことをあやまちたる〜んもいひこ
らんふをぐうなりたほえ給り
に、んとは、おふゝろなきゝ人をせんう〜にふんをひきいんをあやゝ〜ゝとゝる
に同ゝろきゝをとは、に、んゝの手のゝろきゝたのゝ、あやまちたる〜んとは、
ゝゝコナとたる〜んゝとなり、ゝの云は、人すきそてに、んゝ〜ゝそたゝをに、んゝの

中のゝろきゝうたのゝをたゝひ、ゝゝコナとたる〜んゝをせらいひゝう〜ん、にそゝう
うたをゝ〜とゝふゝ云なり、に、んをたゝるをゝ、ゝるそ、ゝ〜ゝ後本篇代、
ソコナスカヌ人い未熟ニイヒソコナヒ、シソコナヒデモシヌヨトノアル時ハ遠リヨモナク、
笑フキニナルトナリ、と、れたり
ゝとんらう〜ん人は、我をにくむとゝ、我を牧、人をたゝひう〜ゝろ
むへけまこゝんとさ〜をゝんゝ〜ゝは
ゝの我いゝとにんらう〜ん人の我なり、人をう人は、我をにくむ人なり、ゝ〜の
人をを牧れもいう〜ゝろゝそ、ゝ人のためう〜ん、ゝに十人けまゝゝをゝることは、
さゝうにおゝんゝゝぬものなりとゝふゝをゝ次ゝをゝ〜をゝう〜なり、う〜ゝろむは、
トリモツナリ

ぶこいふうりてそぼる佛たち三ほうをおそれ給へ　御つとめはあさしとやはと
さ法ゝなるまんてゝおはうにぶこうふうに世の人で程ほゝき人は程
らうう如へ

三寶は佛法僧なり　慈悲ふう死佛たちをそ三寶を謗誘するつとめあ
さしゝそとに法ゝるあさしとはとに法を法志の慈悲ふうき佛なゝはおはっ
り法とそさのみはとめ法ゝまをそ程佛ふうりまてゝおはりにさと
の意なり　程つゝさゝい我小ほゝき人は程ほゝき人とてあるへ　といい
ふ名なり　その〳〵きは　ムニイ　ウラメシイなといふ意なり　さてのあたりう
書に以德報怨何如とんへるに何以報德となにうかたへたる人を小う
らひたりさた清女彼をとに死さ法あゝ死め尽もつとはうゝんと思ひな

うゝ小ゝとんるをけふ人の業障なり
程小をゝ死さろてんそんとんそこの業をんひつけむうひそけゝきき
あゝうきそうろそにとゝさはあゝにまてうくゝうそへはなたゝうる
とのけちめそんの法とそ死え侍るうゝ
程小をゝ我小つゝき人をんゝ小れまそんそんとはつゝきむ死に我らりまうう
さ海ふんそんとその意なりんうきとのもつゝき人のためふぶゝくあゝうそへ
きこのそれりんひつけんひゝ手をそ人不はるをゝふ或そ侍るそ人と業ひゝ
てけゝきあうゝ拘そんそにまそうろそにとをとんへるにそこれひとつのさ海なりさ
てまそうろそにとゝなにのたけきことはあゝんとんへる意なて次の一のさ海となり
へてんるさうゝのとそゝ小次のなたゝうなるとのとそゝ一まてう拘てさはあゝに

そこはこれそまたさきにけしきたちなる方ふはあるべしつきさ海をもそてうく
しうそはなにとなくなたらうなる方海出てゆるまたこのさ海なりこの二のさ海の
けちめ也人のこのさうれたりのほとは又ゆるとんるなりなたらかれたやう
なるさ海なり又所のいそれけらふのそこにとのとのまは術なりおかくまさうこのほに
とおかくなたらうなるとのけちめあきんのほとは又て作るとゆふ文なりとそとんひて
はまらにきそこに文をなさにとんそれきまおのれとんらうん人そ竹下義
悲ふうに仲のこのをを引竿たく博き人は博き人とてあるきやをこ
とうて そつしてゆるにつきそけーにたつとなたらうなるとをくへて
んの結芳と又角とんへうなり沙の石集内作そ武親のなあつき人なしとそれ
きうていそんとにうさ海そ又孫そそふんのほとは又て作るし とんへうもなた

らうなるうたを結ばしたりとするなるへし　さし数やにたり
さ海そのなんしとれよ人作あへしうすろふらうにを花をいけるこ
元しを作るあんうにをうとのたけうきうえ作るし
あへしうそんうなるをにうとフミキニ忌なりらうにたをひけるそ武親きの
孫を神でそあきをのふたをいけるなりされとさう海そ武親のあるほとい
この内作のううとのたけうきうそれてなりとれり
うち帝そうへの源氏のをのうたり人ふうをを結ひてきこーめーけるふの
人は日や能をこ結をみ注へけまこ海ことふさえあるへーとの結ををけ
るをふとたーそうふんそうなんさえあると度上人なとふれひちく
しーて日や能のれ書注孫と結はけたりけるれとをうし結作

この人を、源氏物語はじめ、諸の式部をさして、帝王代々の御詞なり。日本紀を、師の日本紀私局考に、日本書紀をうめ、史のことをの注へつらねられたり。ちみ注へけれ、つれのやを、れうくあれとこはきえあて、ちみなる人けれの祭り、なる人に注へて、注へといつ詞にうる仮名をされそなり。さえ、才のまを、なたるふれへるにて、学問のうたのさえなり。ふとたしそうにて、この五書内伝のたしそうになり。れしうなんさえあるとは、内伝の、庚上人なふれひちるにとそなり。侍中、帝王にさえあるとあれとれう。今教中にゆをしなふちうたれとをいはえるとありしを、誤れるにはやさるは、帝は方なへしとの注ひたるを内伝をたしそうにさえるとをそをしてさをに、庚上人なふれひちるにたしそうにとあるの詞をとくうれへまそなり。そとの源なるはうえへふは、さえあるとほめれへまこ酒

にそ、下にそ、女の学問なそけるをそをしてアそれへる云なり。さそ帝王代々紀の局とふなくとアなるそつは、たなるこそ帝の給せられなるちるの要しきさ局は、日本紀局考ふそなるとそれちけれをそふふは首けりをうるふるそ可笑うなり

さのふ仮さとの女のさへ中そなふつみ作るものをさる本にそ、さえさうしれて作るんら

ふ仮さとは、我里亭、女えつうへ女なり。つみ作るハ学問なそするさ法をなり。学本ハ内そなりをれふ学をさうしをそ作るんらはれうそ学にそ、さえさうれ学、さえの学をそ作るんらとれへるにそ、だふとれそうに内伝の学くれひちるれ学、学えつけなとをしをそ下にそれとんうくつるさらにれる云なり。らハやにをれ歌

息の声なく、ふねにうつしても、すえうの浦なるへくらをたもち、
この式部丞と申す人のわかそにて史記と申すふみを、よみ侍りしとき、
なくいくうの人は、れいのうみとう、ますて、不なることあやしくおもひて、さ
とく侍りしうは、ふねにのれるたやは、くちをしう、をのこにてもなく
ぬこそ、えさいなうけれと、ねつ、ねふかけうれ侍りし
式部丞は、式部の兄の惟規と、侍りに、史記は、この司馬遷らほくれる書
なり。この人は、惟規のさ侍なり。あやしうしてきこえは、こつうのさ侍なり。ふ
ミトんいれなる親い、ゆ、為時ゆ、系ふの、ふ、傷者と、へり。まこの人、越後ち
ちの、淡路になりたるに、ふくく、ゑ、ちを、越前ちになりて、後世徒、の、
うたの、ものにくそうそたるを、ふつまの書にも、城ふ、越後のけちめ、ちらくいし

きさ侍ふそたまは、今くそ、ふへり。そまためふ、こうくこうくのさとたちをん
へる、ゆふうたて、人ふえするものふは、れいふ、ふをやたをさるれる。次とのさ侍をれえんかは、
うくうとは、えある侍をきさなり。　史記とは、数千年ちとにな。　さと
く、数千年にる

ゆきれをを、をとこたふ、さえうう、ぬる人は、れいふ、ゆ、それやうなるこのみ侍る
めるらと、ゆうく、人のれしをきてとのちこ、点一をしをたふ、うとたし
侍りに、れとさいふ、あさ侍く侍り

ゆきれは、ゆ、ゆ、るうたをれしゆ、えうぬふ、えんるなるものうに用めるれる。
ゆも歌息の声なり、ゆうく、ゆ、ゆふ、惟規をうくそ、ゆふ、れは、こうくゆ、
らはなるこくれなり、さて童ちり、ゆうくれたれかなりて、ゆのんをとちりて、ゆうく

人のかたちをそなへてのちこそ人ぶりもしたまへ。ブチャウホウなるさまなり。雅
語訳解に手椎ともいえれなり
うるはしくふるまなとんひけんそのあやまりとあやになりて行ひにれらくこそ
ゆかしことなく侍りしうはれふ人をはかりそにもくんとまつりさ
にれひさふのうるふうたることをたから侍ぬこと行ひしを
めふとこうしいそ毛たてしるをろしとたにうてなりこ風と
は集の内侍のさえうぬきりかれひなるとれり人をはせけの人をなりにく
むんは式部をなり。うるい出て上つこなの意なり。俳注か紙をたいひしと
なりうるりなしはたふれひやふにとあるひ。ほさに紙とうんはつたな
し。後本義えく下にあるて。ふ詩なとのあるをいへうといえれなり。侍ぬと

紫式部七論に。えらはぬとあるこのたらし
文のたまへにて。文集のあるをらはせなりさまのこと志ろ
しめさせはかげかたはたはたまりのはんとりのひて。人のさふるをは
とはひまくにをとくしの文こころろう。楽府といふふみ二くうん
ろ。ふとけなくうるやうへたてさえさせて侍をうくし侍り
文集は白氏文集にて。この沢はたくさをやを書なり。侍せ注へは式部に
らはめ注へなり。さはめことは。詩文なることなり。ろうしきは男長たの
さまにたはるなり。たはふいろなりいの場なり。をとくしの文八寛弘四年
の文なり。楽府は文集の中なる詩の一体なり。ことけなくはトリシヤリナキ
にて。人かうくしてもひまくかをへやさはなり。　楽府。彩女。平に

ら　をゝへたてこれを同一

同上

ふをゝしのひさせ給ひしうと度もうちと書きを書せ給ひてれ

ふみとをめてたうせ給ひてを度は書せ給ふ

うちに常なうおそうへとゆふことを書きて中せう。歌にそうちとらふとを者さとを。うへとれとゝ　するとすろあり

書きい書らみ給ふ書きなうれふみとはさるさ海の粉くの書とを

るへしをせ給ひてい人かうしめ給ひてなう

海ことふこうら海せ給ひなとすることをたこの。まれひの内仏は。

えこうさるへしをうたゝはいふ歌を作んとのとまへて世中。

ことをさし書くうれをのふ作りけり

ら海せ給ひい式部のをへてら海めまるを。ら海せ給ふをゆふものひの内仏

は。にや力一ミイ内仏の云なう。とゝさは書と。業とゆて。古今集の序にゆへるこ

伊。されはくさくのとふいきそ。とうく人ゆきゆれなと。まて世中とゆふもの。

うちをのなうとゆへるなう

ゆふゆふ海えことふこうし作うじ人ふふをこのくゆふとゆふたゞあをだ仏

に。たゞ海をなくきやうをなうゆ作うんせのゆとそうきことは。まへて。ほ

伊をこうゆふをとゆふ海なうにて作をは。ひゞやふなうんにげだん

すへうも作うに

なのをへてきこうをのふ作りけりとゆふゆたくうんゞたる海見をて。ゆそ。そ

ゆをゆたくとうなゆ作てゆふゆ海をきとゆふへるなう。ふとをは。ゆ海そきと

なとゆをていをあとなう。さなのとる。今なうは。ゆふうゆひてんとうふ云なう。

あさた仏ふさと阿弥陀仏をうつ師のやうに思ひたのみて、をがみて、往生をみて
修りするさ法をぞ、ぜひ修〜んとはぬへる所、せのんとそ、ひとはぬとそ、しき
うたのことあり。ふもと海〜にいなにと思ひまぬなり。ひ〜をひたるにせを
のられたるたこなひ人をぬ〜う。この若紫まにぬる井にぬりぬたるひ〜をと、枕草
子なんう〜ろなるとぞ係のひ〜をのるまひなと云たるとぞ云るへし。
さそさるとぞかな〜んふきひ〜く思ひとうなるよなれはぬらく今はとかる
をうはけたんすへくをかゝにとふ。けたんは解怠なり
ぎ〜ひたをちかぬむきををぼ〜にのほ〜ぬほとのたゆなし人きう
なんに修るへうなるそれにやす〜ひ修るなり
なをまたあふれたくんをとうなを存て思ひたれとも云ほうやうにも思ひた

ちうたきゆ〜をぬ〜り。ぎ〜ひたをちふをむをそひ　をになんたうへにてもな
り。ぼにのほ〜ぬほとは、仏説に菩薩の菩提をえて、ぼにのそ、格
樂ふんくを思るなるへそ。云は、ひ〜をになりてもしなぬ同のたゆなしへき
ゆあり。なゆたんへきゆとは、紫家七論に式ゆうんの所なし。ほ、そやく
を蝶、尼衣のちくなるへきを、二人の女にほたされて、中えなし〜ぬ云つこハ中
こふ所〜むへ〜ぬへるさ海なり。たゆたふは、ゆうたふさたきうたきさ海
をぬふやす〜ひは、ミアハセルなり
ゆ〜をそたらたほとふなりまて海ゆうぬたうこれらうれぬほまて。
をため〜とそ、さやうらまに、ふをぬとたゆさまさう修〜んものを。
ぬふうに人まをの中て修しと、ぬまは、たゆ海うたのことをそ、思ひ

拾遺

ともまこと年齢も遁せぬにおぼゆるなり申くとあり。なりもて居るいな
りもてゆくかり。れんぼまてい老てほまくしたをいふそためつゝとそこの終んし
うにとも解うたり。新かにそめつゝにそ。ゆにそめつゝこゝろとあはしとも。行さこ
えうたり。そしの詠なとあるへし。怖伝にそめつゝにそとあるかゆしとしれん
て絶らむは。花のとにそめつゝしけなけきとれたるこしらうれんぼまてば。
めつゝにそ。絶らすに。佛たを修りのみもたゆさ〳〵んとふ云にそ。世てた
り。とれそれさんふうたい佛たにに見ひらは。人をさうぬうたなるにらうて以
り。人ゆまに八今ひふと同く。卑かしてんへるかり。この云は。我うつたなに身に
て。佛たにひゝんとにふは。ふふうれ人のすうを。ゆきふゝなんとい云ふり。

拾れ。使こふうれ人は。をたうゆゝにしをこのなひ修ゝしをたのらをゝ
ことをこれ。ほく修是は。らろつふ使をてを。ゆゝうゆ
拾れとは。遁せのうたをさてい。ふ使ほゝ。罪業ゆり。れひ修ゝしい。遁せぬんと
ふ人にをれそにとなり。さたのらを。来世の因縁にて。現世に報應あるなん
ひゝ。ゆそ。我うく遁せぬと思ふ。なゆなゝをきゆりて。すやうにと云世な
は。来世にさ。ゆゝ功徳なゝて。現世に。ふとのれひうたきを。ゝり。さてこれ
にゝなゝに。ふふれひうたきとのあをたあるを。たほくとんゝり
れゝみふ。そうたつけ。修ゝあことをらたをゆゝしきを。せにあることゝ。分
ふうゝのうまゝ出てものうゝに。さうそうをたう。ほゝう修をそう。
れ云そ。人ふ老に消息文ゝ。さるものにそ。そうたてけあことをさのにうたゝ。れ

よめ〜きもそ咲てまたたまに〜歌て上のうたりになりくと書そた
る人のうへのうしあし世かはると。戒牙のうへのことをゆこれ申て。ゆろはふりけて
そえしう侍。上巻の詞てなり。あの文字ふ此下。次に尼なは清見文の詞ふ
て。おのくせはべちふ。まふふうて。それかそへて。世にうたそ此つ
うたはたあ〜んを。をさをうされは。空をふひうたきとなれとになりへたてなくむ
つひきうたなうたなとうたなることをゆれたり。そしむすめのうたへの詞へ正
月三日に戒録のなりれ如房ともいはすうたうちを此へは。今侍しく月にえたる
さ侍ふて。そえたさ侍を。まつうたて。そ次ふ。牧中まうたの如房ふ侍うたち
をれひて。そそてにふ侍とれよ人ふ。琴ふ様ふにうさたまにて。里長しなを此ふ
て。中まのたの如房のうへをとちて。そ次ふ。秋虫の中ねふて。あ侍るの人のうへこ

こうのうへをとうたて。世になり。そうく宮ふて此へは。まへに戒録のなりの大納
言君。宰相宏。宣房宏とふ。三人のことをれひなりそにこの次ふ。人のうたちをうたり
さきさをは。拾芥抄ふ侍くきふ。とふへるは。ふにこの三人のことをれひて。又この
次ふ。俗の人これをうたりさきこえんにえとれふ。ふ。ふれは。ふの三人のことをもうたて
見すふ。なれはなく。されて。上のくなふ。侍。侍ふなと。すへて。うやまひ。世の
れとれはるふ。世ふうたて。人のうへふ。世にこの外ふ。さ。とこのほかなにふ。
不にも。侍なとうやまひ。世の外ふ。世と。なる。大うたつ。紙の格にそたうへを。これ
人ふ。ふうくふふれり。ふれ。ふ〜くなりふこの人は。すへて。んもちひ。ふんのほと。今
さ〜なるやうふれとふの人にれれとくこうなふれは。うくをなを。うふなる。うちくの
日。絶世をなこうこうやまひ。侍をあ〜をて。そ一人のうちえなんにも。まにくる

やうにさはふさたるかをあんうしうそ又師のんそれけるハれうみふうくいよかれうみと
もめてなりこうせ法ないてとかるれうみ中文のうみ結ふ書申あふ志えんりいふ
しへの書にさはふくのことかるうものなれとそれふとええてけめとをふうくいたこ
らに笑へさたるはけしとふふは老人はうの中れるあうせ法えはそはれ志いや
りと申れいてぬくはあうていろけれはうんへうれり志ふのたえ中とかるう
このとなりてのうきのこなたまてえれ中あふ笑へさをしうれなるものをを
えせまうとするうなりとふさふたのうれとうれり
けしうぬ人を見へきうえさにそもうへきことやは作るさふとは
きくふたうはすんまたはきくうんをれらんせうえはたはうんこ
とのんとうやくなることれはうへとをうせ法へえ法へん申め

にてをちり作るはんとはうしうんまたくをたはくる作る
けしうぬ人さけしうあうぬ人ふてはうにうるうきんをふうるうきことは
にんひたるんのうへうしなとふてうるうきんをふうるうきこと
ををうふてえすきとうはたさふたつなきうしんの中方ふて御れてさは
ふたをふうせ法ふれ方なんふえなり志なりされとはうるへきことにあなり
てんのうへやうらうそはふんひてんうなることなふふふふうるりはきくにを
ふきくふたうまうんはふれらんせうとふりまたをはきくなるに
うてうはとうたなりとふふふうえるをふうをなふれはうん
をのあうはうあうにやくなるとはをたはくはたをおーはうせ法へふ
りえ法へんは拝見ワカヤワランなりゆめにてはうをめにてをつをふりち

り作りを外へちらせば是他の人の見るをそこなふ心なり。うんぱらて。
そ他の人の見たりんかは心をしるべしうんの見ずり人のへをとうく心
たるとなれまれまたくをそこなに於れ作ちんよ是んちち
にあるなり。そのふそ作ることの作て作ざる事。次の作ふ又曲
たのころはんごとを。これやりやさうしれひをなるやはくりにこの
是しを作りにしれち人のふメを作にうつふまざとてじとなれ作
る故心とやはきたることをろをこうたかは作にに
やりはやブり名。ひをは今せめの是の三月言にはるひをり。この比さ三月言にはう作ぬ比なるさ曲
は是宗也。任墨貧也なとにえたり。又このひをと心とはくくたり。さそこをはおろ原小人の形をちひさく
作りてうはのもてあるへ人物を物作ふみにひかなとんこ。これちひさくつく

まるをそるのひかふなすへて心へる高也。字も雛とそ。今の世の人もひなとうふ
をふくひかなとも心へは待奇をトんの四時をあ一如房をふるうくと
心ふたるひをひををりて心ふれは濃をは。ひんなとうくをかと書るはた
うりうとあるけふこの伝もきてあれとも奥玉作原ひをなあるひ蜻蛉是
にひなきぬ。一ほのもれなれと江家源氏ふ比比奈なとすへて古書とそにひく
なとあるに撮る人きをれり。古を榜もか女の書名はあけられとおこまりにらまるなる
へ一うれ今ひくをとうけり。をやはうはをひくかをおくへき新のまりになり。江
家於是に心つ一ひををそ一すあをそ一ふ和作へりをたたひさにやるつくり
あつめてまり注へるをなとを是をなり。人のあみを作にそ人りれおせる文もその
やつくりのまりにもれてなりとそ作。うみふきいさるますきひやりの上は文の法

んてなとふてきうめ。はんとかゝぬらん紙ふさといふゝしとゝうことゝ。やはまた
るは。事に。ケンヤクう命ーさすゆをゝ。ところきそは。志うケンヤクう帰く
いるは。そゝめうーうぬうるあて。俗のひきこあたるんゆはるうゝにとゝるはゝ
はこゝちんゝん人乃うへは。ところ死うたのをそはなー。ふゝふゝ意ふとや
はんことゝ。数ゝにる
ことさゝにれらんーてはとう作そゝん。えらみ作ゝぬ事く。をドれと
そ作ゝん。るゝはなにゝのはれらんーゝ。そゝさせ作へのー
ゝさゝにそとう作ゝさゝん。係りそれ賞ーさそ。くゝのへさせ作への名なゝ。えら
み作ゝぬ事く。いうたなのちに。ふうゝるにゝのゝ話なるゝ。俗はなにて。
らみうたきらに。果ーてゝ。ゝ。孫朱義八ふらをせ作ふふ。そ人の

なゝ。とゝふれきをドおゝ。信ふ。歳ゝ。ゝゆをさ。ゝ乃。須ふ。名月にーてゝ。ゝうにて。甲
ドーて。えらみ作ゝぬ事ゝは。歳ゝに作ゝんとゝゆをえなゝ。たふゆをれちなるらーゝ
ゝそを。ゝをドおちーとゝゝへーれとゝゝへうゝ名月にーなるそえなゝ。それをなにのへ
ゝさゝの事はなにうそ。ふうくれ月とゝあてれうんに。きふもあれとゝゝふ。れ
らんーとゝそゝさせ作へそたとゝ。を作へにそれらんーは。見るものなれ。ほけくゝ
へうれくなゝ。今の世にも。しのこに。えのこに。そのこに。なとも。同さ。浦の。歳ゝ。
関ものにつるそゝへうにて。えハたのこになゝ。そゝゝ。を作へは。ドりノケテオキ作
へのえ。

ことゝゝに。数ゝにらとゝなれふらる　　家。をゝにとに

このゝ世の人ことゝゝへをゝひくゝてそにとちゆ作きは。身をれゆひすて
ぬんの。さをふうう作へさうれ。なふせんとにう作ゝん

身をうとひたふる我身をすてたる僧うは世の人をのうへをとうくやくゝ
あゝさゝ僧を打うちにゆるハ身をゆひすてぬさとあり。さをあもあなゝ
図一なゆせんとにうえなにせんなめとてうの志にゝ下にえ丈てやくなをてをか
けり。とゆふ。ふのつゝゆゆ。正月一日とゆふ。あをて。つゝさにそゝ
ゆゆて。上のくなり。ゆきくうををれり。海に上のくなり。戒里亭にあをてうけ
さゆゆを。ゆるれと。里亭にわりたらゝををれは。さゝあをそんひうをしゝ
ゆひくて。新かにうをて。てゝをくさゝ

十日ゆあのつゝさ。こだうへをたうせ法

弟に。正月一日のとうゝうをゝ。あふ。くうけゝ。正月吉日あゝん。きは。この弟ゝ和
ゆえなふゆふ。なゝとゆふゝのをゝたれをゆく。されと丈ゆの消息文ゆひふな

よのやつゝにこのまゝ仏ゆにゝゆうとあるをえれをほとへたるさ海ゆよさこへた
ゆ。さゝをなり。法成寺の御堂なへけれとゝ。ゆゆつゝをゝゆゝうちのたふうゝ
とゆう。そうは。法成寺の無量壽院ハ。寛仁四年。道長公の建立ゆて。紫の孔雀明王。日本地図。
百錬抄。なとこれ。ゆの。金堂をゝめ。猶くの御堂を建法ひたるゝ。これをのに尽く
なゝは。寛仁四年ゆ塔のとなれをなり。されと。無量壽院金堂なゝ。法成寺内
ゆ。一院一堂なれは。さとゝう。法成寺ハ。をゝくゝうあゝゆくゝのゝ。ゆゝ。ゆゝ。されを。ゆ
ゆを。法成寺をゆ。ゆなゝ。寛仁三年。道長公お発ゆ法ひて。この寺にゝゆ。ゆゝ。法
なるにうて。法成寺度とゝ。御堂度とゝ。世にはゆうゆめり。法
成寺ハ。拾芥抄に。近衛北。京極東。とゝなり。されゝゆた。寛弘三年。十二月。法性
寺の内に御堂なて法ひて。仏岩あゝ。日本地図。百錬抄なゝ。ゝゝなれ
ゝゝ。これをゆゝるにや。要ゝくゝ。法性寺ハ。拾芥抄ゆ。九條河原とゆ

り。をこのほか木幡の浄妙寺。寛元二年。道長公の建立なり。同じき十月十九日供
養。また同三年。十二月。塔供養のことなど。大後嵯峨院。日本記略。朝文粹。百
錬抄などに見えたれど。浄妙寺にてあるべし

清車にも。とのうへ倫子。人々は。舟にのりてさしてたりけり。されはにく
きてらうさりまする

それには。倫子の。供ふえたまふなりて。式部のまれるうらうさ
り。今ゆかしと思ふ。ゆふらても。木幡にてそ。へうに。京うはほそほけ
きはなく

教化はてしとて。山寺のさほうつて。たまんけ懺悔。ちんたうた
と。はほう名ふ。ゆそ。けうしあるひ陸奥。ちんたちめ。はほくはまり

て法ひて。すこしるとゆり法へる

教化も。懺悔。法師のはてなきさんうさほう。作法なり。ちんたうさ
ゆかの路ふ名なり。うらうに。あるにやいとひてゆらむへ

法師はれたうし。けう化とも。法相。ちんたん人なう。文内中宮
はたうすてらうをこち。へきしなことはたえてうはて
も。あはにあり

法華。和歌に書へたる法華にて。法華のはてなひかり。ふふうくあれは。あなる
は。和歌乃尼なへし。法相。或仏性のふへらく。経の文面をもよ。法相。法華ふ
ひて。経文のあうえれたる處を。法相とふひ。経文の法き意を法意といあと。
せ人は。法師のうはおて。一ちうなるにんくとなり。うてはてしてはそ。中宮

おなじくまたをれふあふさなりて、なにはのことなをなほへこちうひさ
しなどの十さ、解うて、行雲八語を問ふ、とゝ、ものすう、さるをたくそゝる。
なにはふるゝゝえをにわとうく以ひうたくなん、清涼ふ、涯こうなたる八、あの方をえ
てうけるあ、佛経ふ到彼岸なと以ふてもあれとうそうれてそ以へうたゝ、経
文の意を、みしうく以ひたるに、法師なふもひあるゝ、是へ
おとそて、度上人、舟に乗て、ふれこそ、つきてあるふこだうのひんう
れ浦ふ、ふむさにたしあけたるとめ戸へ以けふ、ほくうれてゝ、たゝ、そのの
うゝらんをれき、て、文、方、は、お法へう
おとそて、八、法師のとそゝ、舟はこの寺のうち、池なる毎ゝ、れ、て、は、
うへテなう

度、おうゝ、う、海ふ、海ゝ、せ、法へる法と、宰れ、君なと、ねるたりゝて、れ、て
へなれはうちとけぬらふ以、うちを、内、外、とゝ、をこうれ法とふう
拙うたりゝて、宰れ、君と、武部、たり、れ、て、八、道長、公の四男なれと、ゆきゝくさの四
男ふ以をかたるふえあゝ、ふ、おそ、道長、公のまゝ、せ法ひて、れ、ふかれそとふ以ほ
とめ、意、方、せ、うきほとは、そゝ、ゝ、くとのうちとけ、たゝ、れ、て、みう
こゝうに、ものやうるさ海を以ふ
月れほろふさ、れて、ゝ、ゝやうなる君を、ゆきうたりたゝをふ称
に、ものをほせたるを、そゝ、ゝ、せうく以ゆゝ、て、大ゝ、ゝ、の、れ、て、ゝ、藤原正光卿
海ゝ、ゆきを、さに、うふ、こ、ろ、うちをへんもて海ゝ、れあや、志のひやこのふて
ねたるゝゝ、うて、れ、せ、うゝ、人中きは、と法のうち、れ、人を、みそうに

ことゝふ
をほせたまひしは。若君をいたはりてたまひし大殿ゝのみことのりにて。とのゝ御こゑ
なり。をほせは。かへしをのへたまふなり。帰らく。おほえとは。うゝやこのなる君を。御にの
りをほせたまひしはまかり。うたうたふとて。つらをうしく申ゆかにとりく。つゝんで。
うはしあやまりたるものなるへし。みのうへにて。文をなさは。きこをほせたるその
ぞ。はかの意なり。といふはさこの大殿々。年老たまひ御ふ申ゆゑにおなくはズ井ブ
相應ニとふ意なり。若君をこの中に。年老たる人なりしをおほかなく申しり
なりさにつかふく若君をのうた中寺に年老たる身にてさにふさくの意
なり。をうしう可笑うたなり
御ことちかや。それをはつとつゝん。よんひたるをきてつけ給つるにや。大
丈。徐福文成誑誕れほしとうちにてし給ふこゝろをさへあらはして。
いとめづらしく見ゆ
御ことちかやかき人々の詩経へたをみて。たそかれに。秦の徐福ことをさしひとせ
て。白氏文集なる。童男丱女舟中老。とあるをとりて。をおほたの童男丱女
とをの蓬莱にもいたらねはとふ舟の中にて年老たるをうつらんと思ふ
て。かのさ御年老たる大殿々を徐福とし
若君達をを童男丱女にたとへたまへるなり。うこつは。徐福にたてうられいてく。まことしく年
へたるをそれしふうこのけて。老たるをそひしく思ひの意なり。いひたるをはさてにか
たる人にのれひたるなり。おのれ一とせ人をしをたふうれてたし給ひしとあるをえれて。式部
われひたるにそわりし。大丈におのれたる意をまなるへし。やうてきてつけて。次の句
を誦し給へるなり。誑誕は。おほつかなひたるものゝことにて。いとふたもなきことかいへり。

またもろこしにては史記に見えて。徐福は。徐市とも書て。秦始皇帝の時の人。文
成は。漢武帝の時の人なり。委しくはさらに史記と。白氏文集とを見て知
るへし

池乃うき草とうたひて。水なとふきあはせたるは。この月この風のけ
しきさへ。ことにあはれなることにみゆるなり

池乃うき草。此白なるへし。さて寺は。やうにあひたるおなるへけれとも。ゆかりたふひ
ては(?)されとも。ことはたとへは。川のうき草なと申やうに。水につけては。池とも。とく
云へて似るなと。源氏物語にも見えたり。さて又すて。清堂にての事なり
源氏物語にも。ゆかりにある事とのへてゐらんして。書のすゞろこととも。作き
たる清書にうつしたるは。ことに書れたるうへに。御せ給へる

すゞろとは。さはゆゑもなくて。ククワモナイコトなり。源氏物語のうちにも。記
うたしき人の心さへなるなとて。それはすゞろなる式部もあやしからんなと。たはふれて
此御上なるへし。次の御前。即ちさる事にて。式部のためにこそ。気をすることなり

すきものと名にしたてれは見る人の。をらて過るはあらしとそ思ふ
かへさせたまへは。

人にまたをられぬものを。たれかこの。すきもののとは。くちならしけん
むらさき式部とよみて申

すきものは。好色モノにて。式部をさして。御上なり。その答。好色モノと。式部の
名にたちてあれは。それを見る人の折らて。そのまゝにせぬはあらし。すきものゝな
れは。誰もえをらてやみなんと。思ふなり。梅の枝にかけたる紙

にかよはせ給へるにや。さて梅のえんに味の酸に好色ものといひ四の句にも折て
とよめるはいづれも縁の詞なり。古今集にも梅花をりてみむちのこなれにたや。すきも
のとのみ人のいふらん。また梅花をにほはせてやしきへすけるものとや人の見
らんなど梅にいへること拾遺集にも見えたり。いたくなさせたまふもさることにて。くだ
したり也なり。さて式部の此返しせられたる。人にまだをられぬ又ものえたるにて其の
宣孝になれてありし後の人には又とをられぬものをの意なり。まだの言に、あ
られ。三の句以下。道長公の此常の一二の句に答へまゐらする詞なり。くちならしけんは。
いひならしたんなり。味のえんに口とはいへるなり。めでたし。むかしの物語にはあ
る御さきとをとらひておさとほまうその詞なり。とありあまてまた一段なり
又渡殿に寝たる夜。戸をたゝく人ありときけど。おそろしさに。音もせで

音もせで。あかしたるつとめて
よもすがらくひなよりけになくなくぞまきのとぐちにたゝきわびつる
返し
たゞならじとばかりたゝくくひなゆゑあけてはいかにくやしからまし

又渡殿は。前にまた渡殿の戸口の局に見出たせば。とあると同じく渡殿の
局なり。たゝくは道長公なり。この前二首とも新勅撰集に見えたり。四の句へ
しうちもしはらくまての意。よもすがらは。夜もすがら。水鶏のたゝくにたとへて。なく。
きみたの我が局の槙の戸口にたゝきわびつると。この句の詞なく結句の意
ひつるは。たゝけどもあけざりしを恨みての詞なり。道長公にてのほど式部を
けさうし給ひての事なるべし。返しの歌。初句は。寝ずにけて。我局をたゝく

くんのあるはたゝとにてそゝりしとゝ[illegible]とはうは時そう
にて[illegible]くのことをいふ[illegible]の[illegible]人我局をたゝきたりをたゝぬとあ
ゆく[illegible]たりしほとふこの[illegible]寺をえをまそは[illegible]をそ[illegible]ゆ〻うとなのふ
にけてけふ[illegible]のれ新なりてとはうたく水鉢なるうに局をあけてゆま
てきまゝゆるは[illegible]ゆ〻うゆ〻とんへにて道長のなくきたるき
[illegible]と姫[illegible]へるに[illegible]たゝうは[illegible]の後へとを[illegible]ゆきりにとさる
りたくとれひて[illegible]へまれり[illegible]とはたゝ寺のうへのみふほとうくけにくう
ぬさゆふ[illegible]なしたゝなゝ[illegible]の[illegible]たるゝ[illegible]後女[illegible]のて
きけ〻初白の[illegible]すに若ゝをたゝ[illegible]とはゝのとゝ伝にそちゝ[illegible]上白
をうけたゝ[illegible]ゆゝとにさあゝきへゝとんれゝけふゝう

にもふるしとも云ゝをたゝ[illegible]ゝ[illegible]をろゝさにとそ[illegible]ゆゝ[illegible]若[illegible]人ゝたむ
へゝさそあふ[illegible]なる寺とは[illegible]の枝かゝとあるにつきては四月の上旬のこと
とは[illegible]りうゝたく水鉢にらせてゝみ後へるなゝへゝは四月はゝりのこれり
さそ寛弘六年の同じことはゝふそをそまり
ふとゝ四月三日清そ文たちゝ[illegible]れゝたゝきもちひにひとにようのほう
を注ふれゝともに[illegible]上ゝうもゆゆる[illegible]頼通卿のゝ[illegible]たゝきまり後ひて
後もちひはゝりつきてゝ[illegible]帝人にまゝを後ふふたゆのひゝゝ[illegible]とふむゝ
いてゝ帝うへ[illegible]たゝ[illegible]をまゝを後ふなゝ[illegible]りのほゝを後ふゝりきゝ[illegible]
を[illegible]なゝ

さそ寛弘七年四月[illegible]れゝ文たちゝをそゝ生れさせ後へる若文後一と云
後者

生れさせ給へる若宮（後朱雀帝）とあり。日本紀略、寛弘六年十一月廿五日丙子、辰時中宮於左大臣上東門第御産第三皇子。（栄花物語百錬抄とえくたる一なとも見えたれ）
にあてゝ考へし。此裁縫のことおふくさまりさて去年十月五日一条院やけて（日本紀略百錬抄同しきなとに見えたれ）同しき十九日帝この道長公の枇杷の御家にうつらせたまひし給ひてのことなり。初出仕にうちもやけふしうは帝はいまだ此にぞおはし
まだとよへる所この此方のことなり。枇杷殿は拾芥抄に左大臣仲平公宅昭宣公家云々と見えたるを今の道長公の傳領し給ひたるなり。（日本紀略百錬抄なとに左大臣枇杷第とあるこれなり。）
大宮は（東三条院）のぼらせ給ふにことし此津のたちまちのひ宰相の君さんのさる文あひなとことふれとなかし。蔵人はたゞみやびやかにはうふ海苔のこのかけたるうたちなところをはすれひそれとことに見え給へ。

ましのもとは名あい侍女に見えたり。蔵人は女蔵人なり。いとよく見えて給へる此女房にまゐりていみしきなる人はいとよくすくれて見ゆ。とあり
たとへひやうに数々平にあり
おもなし。やくすり此女官に召し。名乃はうせさうしなちさいはひきかたりなりやくくすりまゐるまへのことをなり
くすり此女官は元日より三日迄御薬（屠蘇白散度嶂散なとなり）を供する儀式の時、其役にあいらふ女官をいふなり。今は西宮記以下、其すち此書ともに見えたり。
あざみそうぞは大学寮の博士なりけり。さしとこの博士の御薬の儀にあつかるらし。もなか見えなるとあし。うれて〜とふにてはさえめでたからやのそこそなちさうりうさなるきかなり。式はまてめでてさうしなちまとなりしでうくうし

ひあたなるへし。メとの侍に二人は、食の博士おくにりの女房にてそなり。なるへしうさるとれ也。しかるに女房とそ大大学寮の博士めしてさんらるるをかたうしなり。式部の丞やと此所なり。さんらきは、さえうつて、とくおはしたれたるを酒の大学博士に成たるをなるへし。なりやくハ侍かにとりなして膏薬なり。さるかたりやくとなふは、江家次第にカウ茉ノ名ヲ忌テタウ茉ノ号也と尺たり。これそ言の日にまるものなるか。尺たまにそ膏薬をらそるまて、これいて乃女房の侍にそなりて典薬寮ら。侍のごとく、主殿者の方ふくそうあるをなるへし。　さんらき、家か事。

さんらきとを

二日。主殿大食はとあるて、係の客、ひんうにたのとりそうひて、侍ごとくたり

主の大食は、二天大食とふひて、中主東主にて、食を賜ふとなり。なふ

ふへは、中主の大食なり。主とのとりたるは、以中内裏にたり長出

にはかりん。係の客は、河海抄に、摂政関白の亭に、主のをもめ、事を新を拓主て。

あはしたるふなり。さたまて公物なり。係の客と号なり。自余は大

食とふ。中主、右主、兵右大臣なり。摂政長、朱器の食を設、係の客

とふ。自余の摂政の食を大食とふなり。大食事。四月二日。二宮。中。東。関白

係の客。とそなて。江家次第裏書。筆相原等。同しさまなり。なを。関白道

長の枇杷殿にて。注なり

道綱卿　実資卿　齊信卿　公任卿　隆家卿　行成卿　頼通卿　正光卿　実成卿　源頼定卿

うんたちめは。侍大納言。右大将。中主。四系大納言。参中納言。侍従

中納言。れ系。ありくにの宰相。大蔵卿。けん宰相。むうい

いつかはへり。添中納言（後貫卿）の元を糸綾。左大臣（経房卿 兼隆卿）おれなけしの元に後
上人の元の上ふはきはへり
傅大納言は大納言にて東宮傅でうけたまはれ。数年の傾家を行
戒。行戒を頼通と。左馬寮の傾注なし。　むうして。数年にらく
そうえんたき山をまりはへひて。まんのことをんせまりうはく
みをきをえを注
そう宮は。後一条帝のりんたきおそ道長公のなり。次のとをにうらる。
きんのことは。宮ふんたる裁鉄の祝詞か。命　車カタカレとる祝詞なへし。
んをまりは。帝にきり。をうふうへれたをまりて注ふなり。と云を
てこの祝詞はんたうする人のんをとはなんをのうつうもはたハナルなり。

うつうみきをを注へ数年にらる
帝
うへふんとをんたき寄〜人と後の注へをんと新なをこと示し注ひ。
てあとをんなむをうつくしうきおえ注へ
兵
なとはうしきおえ注へ
んとをへ。注朱雀帝のり。宮ふんとは君とあるに同く。元末の元を十に称宗。
おのれをしてに、元末の元のり。新たきとふし注ひては。道長系れたるれ知をたる。注系節
とし。ふかなを注へられをられり。あは。宮なを注へ春宮の菊なり。ふんな
むをは志の注ひて道長公ををんなむにをふ光の注を伺なり。中注へをを。
さ源を。隔的客の人をに道長公の中注へをり
うへふをかう注ひて。帝うへ後上ふんをさせ注ひて。れあ注ひかりけり。後ル

以乃名を結へり。ふつゝそしとおもひて。こゝろへのたるふなとれてそ式部
〈それあ歌〉にめしつるにさふらふそれ歌を始ゝにけ。ひうみなり。
むつうゝを結へさふらふそうたひしかひ。はうゝ海つき。おやのうゝにそいつ祢
此日なり。なめくとてあを結へ。うちんてんにいとうなそなゝも
うへは。上のうたのやうふそ。式部のさふれり。此そ。その結一条帝の御五十
日のやうにて。名を結ひて。こゝの御てにて。ゆを結へり。おを。名をせ結へ。ほそ
御つ。ひうをなり。ひうをたうふ。ゆ。ゆ。きふり。ふ。
り。むつうゝを結へは。ホゼうを結へ。御。平本生にうをんかゝ。ともうる。明石ふ
に。むつうめりなと。系用。ふ。そ。ゆにはきけをとれよ。ふ。おやの。八
に。それこつうゝの御とにて。中ふの御。教のうふ。ふ。ふは。面目。ゆへ。きふり。

直長公用

とれふ。ふに。の結ふなへ。ゆ。祢の日は。ふの河海抄にさだ。ふ。ふ。祢ゝと
ふそて。れの。ゆ。く。帝。今なりなをふはあて。たの日なりのふなりさふ。
に。そうれにふるものゝ。ん。合めくとてあを結へ。うちんてんにそ式部
でめれて。ふをうちはんにそ。うたをゝんとれふて。れうふ。ゆ。ひ。て
をふれとれふふ。ふにとまり
おうなこうゝ。ぬれふひなめれは。れとれ。ふあひきうけふ。ほうけ。それやうふあ
らはほ。ふ。て。ところ。ふの。すき。ゆ。けあて。ひところなゝ。まをさ
うくしくふまうしに。うくむつうの。ひて。ひたりこれふ。ふまるこゝ。
きしけれと。れ。ほとめこそうたる。ふたちを。ひきあけつふまう。結へ
おうなこうゝ。ぬは。おうなふれり。けれとをけうに。ほろけをぬをを。
ほろけのをなとれとを。同。そ。ふ。ふ。ふ。しくれり。ところを

道長公の御詩なりひところは後冬嗣左大臣去年後朱雀帝
ゆきを法ひて二条四条たちはゆるの二条の高たちかりひきの
つはれ食なり

殿へに小松乃なりせは　とうちにしー殿ふあたらしうんとら
なりてふし　此人乃あり　高めてたくはほえさせ給人

殿へに小松のうち拾遺集に　ほうに殿へ小松のなりせに
ちらせためしになるをひう面し　とかるをにしー殿ふあてこの第高たちを小松
になる人事殿ふれり　あたらしうんあたらしくらみたくんとら
りをうく古奇のなりにあひたを引てたらきうなりとなるかりをうふし
此人のあるさ酒ふなるふしにはけてんしらひかる人乃を引てなるよをかう

に人のさ酒てめてたし　とかり　たほくさを殿ふは　ゆの御殿ふ　殿へ　たほくに　に
とふとをて　年に人ふ　ゆくて　なるかりきと　なるとくゆと道長公の御
の人にめてたくゆえれさを殿ふをゆ

又の日　夕つうたんにしうと　うほくたる　をつくりけなる　彩ひて
ほさにて　ゆくてた　屏のうへの　ほとを　ほのうふ　又て　中つきれめのと　ら
へれれくちすきひをめてたこゆ　乃命婦を　もれんえて　うとくしく
は　侍る人なを

又の日は　正月三日　りつくりけたるを　ゆくきはさんきひたる　また一の人乃　枇杷
殿のさ酒　ゆひゆへ　れくちすきれす　へてすきひとは　ゆくんふれれすしてう
きめふれすることを　ゆへり　ゆえ　殿へ乃御　殿ひ　れくちすきひなり　ゆの

今婦をはこそとのりしごそを脱てなるへ
あうさ湯ふ間ごそ〻ごそれれうは正月十あるの愛湯のに
かれ宿あけそそしたりくなりたるにまり注へり
二文い接朱雀帝り帝れたためにそ三文なしと中文の巻方につさて二文
はやをしりれ文十日日本記暑にも正月十五日乙丑於枇杷殿皇居有第三
皇子御五十日事と云たり
きんのたなし而ふねたりふたりれいほ孫をひとつふあをせてこれ
みふさとれるほとをすむひとたひにまりては母子をうをへた
てにてあり
さとのるほとをすむは二人のうち一人里にいてなるかとふのうたき一人の祝ひ

とつふあをせたる湯をてあるをれふ
屋をとたるをはふこうたにちゝ女人をうたゝはるなとそにそさ
しとたまをさほうとくしてことれけまは心やにそてなん
うたにちゝ道長公の詞をてこうたは武新とかかるとたうひ男うちゝ女ノ
ちゝとは中女人はうへまをもうたゝふさ湯をとれふ云にてこの二人のいと
ずつまけふ拙宅しなる湯をそをそちの注ふれうたゝはそは中女人と
この二人にそしらそとをとれふ云なうされそそにそ点へうたれもそ侍宰
れ女房とたれもそれ中をそまにそ中とれふそうとくしてをな
れは屋はさやにきにくの注へとふ侍とあり
日たけてあうのほるこうの君はさくゝれてをもあうちきあう条のう

らさぬ。まんの。すゝ。袁き。注へう。おもあふ。も。えき。柳。乃。うゝ。き。ぬ。えの。すう
めれと。んまめう。げまは。とう。を。こへ。へくを。うゝ。やこれ。海
うの。表は。ふかは。袁れり。まんの。すゝも。ちすう。の。袁な。へ。柳。のうゝを。五。おの
あう。久。めの。うゝ。きぬと。宇。なれり。れう。謂。なと。乃。に。識。考ふ。と。へ。これ。袁
末。のいまめう。ふ。さたすきたるふかはの。とみきて。元。ゆるを。今。元。なう。へのこれ
ら。に。海。とにて。若き。人ふ。とうなほ。海。ほし。たまに。うゝ。やうなりとれり。とう
う。へ。へくを。年。代。老たて。若きうたふ。とう。元。たきれり。代。の。人ふ。とうふ。に。を。
ゆに

う。へ。人。と。十。七。人。を。文。のれ。うたふ。海。ぬりたふ。れ。と。文。れ。れ。を。こ。れ。ひ。は。橋（後朱雀帝 徳子）
三位。とう。へく。人。を。に。を。こ。ち。を。文。式。永。う。ち。に。を。こ。ゆ。れ

う。へ。人。ゆふ。元。を。たと。同。く。内。東。の。女。房。ゆう。とう。へく。人。は。ゆ。ゆ。ち。を。文。式。永。
ふ。ゆ。れ。を。う

みこのとさんこちゆう。帳。に。中。に。二。ところなう。れ。を。中。を。あさ。日。の。光り
あひて。海。を。ゆ。と。を。すて。を。つう。へけ。なる。れ。を。へ。を。う
あさ。日。の。ハ。朝。日。に。ち。く。の。元。なう。光。り。あひて。は。章。を。日。に。才。文。を。月。に。て。と。へ。を。と
り。て。十。七。に。を。月。日。の。光。り。あひ。に。を。海。に。と。へ。れう。朝。日。と。を。と。を。は。を。に
あ。を。う。元。れ。を。を。れ。を。を。う。ゆ。ふ。日。た。け。て。を。う。の。ほ。を。と。あ。れ。は。海。を。の。朝。れ
ら。ぬ。う。は。ち。う。へ。た。り。海。を。ゆ。き。は。ゆ。ゆ。ハ。ユ。イ。を。う
う。へ。は。れ。を。ほ。ー。こ。ち。を。り。文。は。ま。ん。の。ふ。れ。を。ぬ。の。ロ。を。ち。う。を。ん。ゆ。え
ま。柳。ふ。次。の。れ。を。う。へ。に。を。元。ひ。を。あ。れ。を。り。を。を。ゆ。を。柳。の。う。へ。ー。い

のれこうちきゑんゑもめつらしくゑんゐめうしきまれりあるたそ
んとゑせうなれはこのれふやをゝすへりとゐうてゐたり
れなほこちのとゝ様子に見ゆあなたい男ふ学へてはあり宣をれ上なゑへ
けちゝいかゝそなる見かたりやをゝゝすへりとおにれり　れそを況数か
にゝる
中はうさのめれとゑれたきまりてれすれそさゐうゑれみさゐふれて
事風こゐ　ふきはくしくなとはあゝぬうたちの学ゝゆゝうにゑ
のくしきさ海うこーてさ風うたか人をしはへくうとくしれゑは
ひそしたる見ひろめのたりをのこうちきむゑんのあをれろにさく
らのうゝきめれたり

ゑはれとゑなるへしをてまゐれたしをなうそくしくきたいうたちをれへ
るれきい学ふをたるとは見ゆそをひやうなゑ海をれ上なゑへしさ風うたか
ゑ強の人をとさゑのうをふしひくくとゝをこの中ゐうきのさ海をほりてれへ
ふり結本箱い人れしひくなゑへしとれそれたり
拙の日れ人のさうゝ拙くれひれとなくいくしたを袖くちのあをひろう
うき孫たる人しもれ海人の拙とうれうとてきゝうのうんたちめ屋上人
にさしれて海ほれれることゝ拙れちふ宰お若なとくちをしうう法
ふめうしさ風はあしくをゝ作をさそれ学ゝあをひのさだめたるなう
袖くちのあをひはこう孫たる袖にのうきゝさ海なるへし人しものしゝはさ
れをゝ人係れり世人の拙は沖方ふ倍に拙なる稜の拙なるさしれて　れは世の拙

とられつとしるほとふ。こそ称さ酒のろろき神口めざ一ぬてられたるをれ上ず住
られるはさそれるはそ。上を新。屋上人とになる。れちふはれ女十の代と
さてたるほになる。宰お君は。女房なるとめとらるり。侍かの侍従ふ。懐年
とられたるは。ぬそれひるとれり。さ流をる。武新のんふとろて。ぬるにて。それ
は。人のさるおく代ろるきふれあるて。者。神口のるき称さ酒め。ら中めのさた
めれそれとれり。となる。さたあたるなるはさたあてあるなるのえれり
ことる程。蒙が一年に与る。　さため。新かに与る
こと夫は。ぬまなる一ぬき称。ろ人に。おるれのころるほき。れつをるき称た
り。ろるきぬさく。添式新は。おるふ。又ろるれ乃。あや程。さて侍めま
ま。たりるのなるぬをろ一とにやそれあなるちのこと。寄せるなな

ほにしをる程。ろるあやまちれ。ほの乃えたるんをはめをも。えるを
程ふ人けま。きぬのたるる酒さるはれ人れこと乃るは
たりさのなるぬをるをけふの女房とを織物を巻きをろ一とたるさ酒
を乃て。式新の品ふんなる。れ人あをるちれこをは。織物はめと与るすれた
まれれれとれれなるぬも。ほふけては。ろる。称そ。まるに。織物なるぬを。
ろ一と品ふは。あをるちなるをれり。さてそ与をとるて。ぬり。寄てるなる
ま。るるれ女十の代をるの。寄せるなる乃る。るに与程。ろるて。たくほるえたな
りて。ろるあやまちれほの乃をたるんを。ほの乃えたるふ。そほの乃えたるんをは
めをも。る代上を新。屋上人なるを。えるを法上人けまをれ人ふそれ女房るをの与
あ一をを。ろるくえるれをれを。ろるんあるさ酒。んをちひなるをるをれをあ。とれ上

[illegible]上人[illegible]と女房とその減和なるぬをところさと
にしたるとを武和のとわりてゆへられりされはさぬのたらゆうはゆへきこと
なるにとれり又たまふとろーとにやは上まき殿上人[illegible]ろさらーにゆへ[illegible]
とゆてなりまはすにとゆうゆ[illegible]さるんーて[illegible]人うたえたうえにざておふ
やうのえんたちあ殿上人ふさーゆてゆほーゆるてのみゆて女人されら
ゆーゆひならーい文にさ[illegible]さしとまふゆうものなるぬをところーとにやえ
らを[illegible]きなるをえれはらーあーえうひゆひならーはたのうえうう
ゆたるをや
もちひまるを[illegible]上ことをまえ[illegible]れだ堪なとゆうえうひさーゆをにあ
くゆきはふうへの女房はゆて[illegible]にしたまてのひのたゆにたーきゆ

[illegible]ふるまてにてなみゆたる三位をもしめて内侍のすけたちとあゆたま
ひまり
もちひはあ十日の鍼ゆり二の年にまうゆうへの女房はまにまたるとゆ
うく内裏の女房なり四丁はまるるもあるも次なるもゆ帳なるへーひのた
ゆしにたまてなちたふ帝の御をなり記録書なとふ撤書御座なとふ[illegible]
るは畫帝庭のうたになり三位は三位なる女房ゆへ
[illegible]の人さは[illegible]なけーゆをー東乃ひさーの南のさうー
[illegible]ゆちて[illegible]にゆたるに上らうはゆたり
これは中[illegible]の如[illegible]なれり長押のーをにゆたりとゆふとを[illegible]ちの[illegible]
[illegible]たり

乃子孫ひんうにおそれ給ふ。中ごろすこしゐるに大納言君こゆるに君ゆゑ
所柄にたつゆゑ申給て君。うへは（帝）ひるしるのは君にたるの所ゆりに
君たり。たまへ乃まれしたるさ所ゐひはくさんうたな
ひるしるに禁秘抄清涼殿條に平敷（畳三帖。綾綿。南上中央茵一枚。中唐綾。端錦。と
裏打。御剱在御座南端。朝東。東西面。）
をなり
にのうにはむきにふしをうみにてうんたちめ。たふうちのたほれよ。
裏家ちまへ中又ちまへ。に系大納言ゐれらうをは。元元作〳〵さうに
れあるひあり。殿上人はこのたれ乃たいをにあたらうにさるゐ
ふ。地下はさたまれを。うけまさのあるんゆゑ。と
もまさなとまうれ人ゐ

右大内大臣。道長公。敦光公。ちまをれり。地下はさたまりとは。地下の人の
ゆるへうるたふさたまりてさるふふをれふゆうけまされ。四人の人をにて。ちあにさ
ふふふり。花多餘情ふ文敷は。ふるに堂下にて。ちをれり。湖月抄の注に
ちあれは。地下の役なとをたまはなり。　中ゑ方ゑ。家ちにらりてくさへう
うへに。に系大納言。ゐうしとう。（柏子）。既ゑ。じれことは。紅孝朝臣。ゐ家
お中ゐ。さうのふ元と。（笙）。（双調）。ゐうれて。ゐ中。あれたふと。つぎにむ
ろ田。これ殿なとうたん
うへにそ。地下に。ゐへなるうへなる。さうゐうれてそにて。和名抄に雙調曲
ゆうちふ。俗馬樂。ゆりなり。あれたふと。席田。この殿。ゐれれと。俗馬樂のうに
ひも。これ。そ。呂乃音ゆり。　紅孝朝臣。新ちにらりてくさへう

ごく（曲）の拍は、とうれば（破）、急、こうをあ我ふ（外）とのさ（座）にも、てうしなどをふく、おのふ、てうしうちたうへて、とうめうぶれせの海ふをつかう

ごくれ拍とは、ゆきの音をゆふをれふる、とうは、拾茨抄、壹越調のうちふ、

鳥とれふをたうこれなるへし、うはのあたにうきまさはこれなるぬてをそし

らぬとて、とうのれをげしさそうまひ法ふ法、ふなとをたり、破急ばに

へて一曲のうち、序、破、急あり、これをれふ、おのふをとうめうるをのうちたうへたる

は、伊勢、海にそあるし、とうをれ水てをへし、伊勢、海、これと催馬楽の律

れおのなり、　こく、下若菜まにこくの拍をとをて、新や平にもこくつるにる、

ふるゆうし、新やにうてくさふ

右のたと、わこんれとたをしうしなと、うをやし法ふされ法ふをを

しをてにそれみし、れあやゆちれれとほしうをて、をる人の身

さへれ元仏ふし、れたうり拍、ふえ二、第にれまてとを、をえ仏ふし

右のたとは、きてやし法之、係れり、あ琴うひき法ふにそあるにされと、おにわ

琴れをさるは、たちたるにや、され法ふ、ひをそく、人をみたうはしく

され法ひしをてにそれみし、れあやまちなるつかしををて、身さへれ元仏ふ

しとれう、をる人は、武彩をう、れ元はゾッとほる、をなうれたうり拍は、岳長を

ふう、れ先ゐなと人の勝り拍ををへし、　やし法ふ新や平にうれ、ゆをし

をけうて、今ゐうしをををへなり、　れと法しををを、新やにる

跋

紫式部日記。此之其所著源語。其文似稍遜焉者無他。彼屬虛構。此則據實。亦足以相發。併以見紫氏之全矣。獨奈世之愛翫尋繹者。彼多此寡。以致舛訛重

累殆不可讀清水子慨焉鑽研有年考覈良勤又諮詢師友舍己從之作釋四卷然後裳弍之面目無復隱蔽猶披雲霧矣其功亦偉矣哉

癸巳季冬離屋鈴木脹題

鹿田松雲堂藏版書目

紫式部日記註釋 全四冊	肥前風土記 全一冊	神能御蔭日記 全二冊	貞丈雜記 全十六冊
詠歌心乃種 全二冊	杜樊川集 全四冊	山城志 全六冊	曾茶山集 全四冊
大和志 全四冊	漁隱叢話 全三冊	河内志 全三冊	新選文語粹金 全四冊
泉洲志 全六冊	奈良縣管内全圖 新刻全一折		

浪花書林 大坂東区安土町四丁目 鹿田靜七